

「山岳会」を考える

『山と溪谷』4月号の編集後記が面白かった。ちょっと引用させて頂く。タイトルは“がんばれ山岳会”、「山ブームの影響からか、山岳会の門を叩く人が増えている気がする。私が所属する山岳会（会員約20人）も昨年3人が入会した。そこで問題になるのが、新人教育。他の山岳会に所属する人と飲んだときも、その話題になった。新人教育の山行が増え、自分のやりたい山ができなくなる。新人を育てるノウハウがなく、どう育てていいかわからない。やっと育ったと思ったら退会。徒労感だけが残り、門戸を狭める山岳会もチラホラ。新人の増加が山岳会を疲弊させているのなら皮肉な話だ。しかし、山を学びたいという登山者に対して山岳会は門戸を広げておいてほしい。利害ではなく信頼関係によって技術を伝えていくのが山岳会であり、それが山文化そのものだと思うから。そして私も、今年こそ山岳会の活動を少しはやろうかなと思ったり、思わなかったり」、編集部員の阪辻秀生さんの後記である。

もう一人の編集部員、大畑貴美子さんは、「先日、西穂で遭難した若者は初めての雪山だったという。つくづく雪山の魅力と怖さを同時に伝える難しさを思う。ガイド記事で『強風に注意』と書いたところで、結局、活字はその危険をリアルには伝えられない。現場で本当に必要な技術を伝達するには、やはり山岳会の復興に期待するしかない。阪辻クン、出番だよ」

大畑さんは「山岳会の復興に期待するしかない」と書いているが、山岳会の復興は期待できるのか、ぼくは否と考える。悲観的に否なのではなく、登山史的に否なのである。この十年、何回となく書いたりしゃべったりしていることだがぼくの修行時代、山岳会はなによりもまず登山学校であった。毎月一回訓練山行があつて、先輩たちが代わり番こに手弁当で新人教育に当たってくれた。なぜか……。その理由は当時のヒマラヤ登山のスタイルにあるというのが、岩崎の持論である。

エベレストが初登頂されたのは1953年、日本隊によってマナスルが初登頂されたのは1956年、当時のヒマラヤは極地法（包囲法）という登り方で登られていた。ベースキャンプを設営、C1、C2、C3と、必要に応じてルート工作・荷揚をしていき、最終のアタックキャンプで準備万端整えてから山頂を目指すというのが極地法で、多くの登山隊員を必要とした。隊員のほとんどは荷揚のためのサポート要員となる。

登山隊に参加するメンバーは、我こそが登頂隊員に選ばれると勇んで参加するが、実際に山頂を足下にできるのは数人、田部井淳子さんのエベレストを例に引くまでもなく、一人というケースも少なくない。登れなかった隊員の不満爆発も報告されている。そんなことにならないように自前のサポート要員を育成する。それが当時の山岳会の新人教育の目的だったのではないか。（次号へ続く）